

「貴女は私になり、
私は貴方になつた。」

「それは紛れもない現実です。」

『入れ替わりダンジョン』と呼ばれている文字通り身体を賭け、宝を手に入れるダンジョン。入る度に配置が変わり、最奥には家一軒が建つ程の価値を持つアイテムが必ず落ちていくという。

だが……そこに挑む者は殆どいない。このダンジョンには挑戦者の身体を奪おうとする動物耳や尻尾を持った魔物娘が闊歩している。

魔物娘は人間に使役されるぐらいいしか生き残る道が無い。だからこそ彼女達は血眼になり襲いかかってくる。人間の身体を手に入れる事さえできたら、地獄の日々は少なくとも終わる。自分が魔物娘だったら誰でもいいから奪いに行くだろう。

……そんなダンジョンに挑む一人の青年がいた。年は二十代前半だろうか？ 愛用の剣、ナイフにいつもの身軽な男性用の冒険服に身を纏い一歩一歩進んでいく。その剣には使用者の名前がうつすらと刻まれておりアルファベットで『アキヒコ』と刻まれていた。

人が横列に十人は並べそうな大きさのダンジョンの通路には、大中小様々な障害物がゴロゴロ転がっており魔物娘達が隠れるには好都合な場所だ。奴らは様々な特徴を持ち、素早い者や中にはスライム状で突如真下から襲ってくる者などもある。

すると突如彼の胸が光った。一瞬どこからか攻撃を受けたのかと思ったが……特に何も起こらなかった。だが……光った胸はそのままであり、これが何を意味するのか理解した。触られたら最期という事なのだろう。

「俺は、俺のまま帰還してやる……！」

果たして彼の運命やいかに……。

「誰もいないな……」

来ない、まだ来ない。奴らは絶対にこっちの姿を視認している。ならば皆が様子見しているのだろうか？
奴らからすればアキヒコという獲物は早い者勝ちではあるが、武装している彼の胸を触る事ができなければ、命を失うだろう。誰かが死ぬのを見てから漁夫の利を狙う魔物娘だっているに違いない。

「だから……奴らは絶対に協力してこない」

早い者勝ちだからこそ、連携は絶対にしてこない確信もある。例えば誰かが囷になり、もう片方が彼の身体を奪ってくるという方法。わざわざ自分の命をエサに他人に成功させる魔物娘なんて絶対にいない。

「(順調だ……このまま行けば――)。

その時だった、彼の左側から緑色の何かが飛んできた。慌ててそれを回避しようとするも失敗し、彼の左腕はそれにグルグル巻きに拘束された。

「アララウネ……!!」

藁で獲物を捕らえ、日光や水を摂る森に住む魔物娘。緑色の身体に多数の藁と頭部に生えた花びらに下半身の球根が特徴だ。

ぐいっ。と蔦に引つ張られバランスを大きく崩す。さらに他の蔦が彼の四肢を捕らえんと迫る。奴の狙いはこのまま四肢を完全に拘束し無力化した所で大きく引き寄せ、身体を入れ替える算段だろう。絶対にそんな事をさせる訳にはいかない。

倒れそうになりつつも空いている左手で小回りの効く予備のナイフを取り出し、瞬時に蔦を刈り取る。

あまりの早さにアルラウネは驚き、作戦が失敗したとそのまま撤退するかと思いきや、蔦をどんどん彼に送ってくるのではないか。

一つ一つ迫る蔦を冷静に一つ、また一つと今度は剣で叩き落としていく。ヤケクソになったアルラウネの顔は必死の形相で、何としてもここで決めてやりたいと意義込んでいる……！ だからこそ、ここは行くのみ！

「だああっ！」

アルラウネは予想もしていなかった目の前の男の行動に目を見開いた。戦う意味は全く無いのに、声をあげて突進してきたからだ。もしも蔦で胸に触れたら入れ替わりの条件が整うならそうしただろう。しかし、それでは条件は整わない。あくまでアルラウネ自身の手で触れる必要がある。

的確に蔦を叩き落としてくる男が至近距離にきたらおしまいだ。煮るなり焼くなり、思うがままだろう。だから逃げるしか――。

「いまだよ『タマモ』ちゃん！」

影に隠れていたアルラウネの命の恩人の手が、男の胸に触れているのが……見えた。

「えっ——。」

アルラウネは仕留めきれなくていい、ただ命の危険を察知させた所で撤退させたらそれでいい。そのつもりであえて声を上げ突撃した彼の胸に……別の魔物娘の手が触れていたのが見えた。

「なっなんで……」

お前らは協力しているのか？ と問おうとした時……彼は急な浮遊感と共に、自身が空を舞っている事に気付く。慌てて周囲を見渡すと己の身体が青白い半透明になり、真下には見慣れた男が魔物娘に胸を触られている姿が目に入った。

その魔物娘はアルラウネとは違い、人間の肌色に腰まで伸びた美しい白髪を持った可愛らしい魔物娘だった。年は十代中盤から後半だろうか、少女から女性に変わりかけている見た目をしている。

そんな魔物娘の頭頂部の白い狐耳はもふもふで、見ているだけで触り心地がよさそうなのがわかる。尾てい骨から生えた一本の尻尾は後頭部に当たりそうなくらい大きくて、ふわっふわっでもっふもふ。しつかりと手入れされているのか毛並みもツヤツヤしているのがわかる。

この魔物娘を見るのは初めてだ、数が少なく高値で売買されている『妖狐』と呼ばれる種族の魔物娘。妖狐は使用人が身に纏う黒を基調としたメイド服を着用しており、つい目が行ってしまう大きめの胸が白いエプロンを押し上げ、その可愛らしさをより強調していた。

「成功……した……?」

「っ……!」



目の前から声が聞こえた。そこにいたのは今の彼と同じ青白い半透明な身体を持った全裸の妖狐。男が見たらゴクリと息を飲むだろう。そんな美少女に目が離せ……いや、呆然とする事しかできなかった。

こうして彼が半透明な身体で浮いており、目の前に同じ姿の妖狐が浮いていて、真下を見ると人間の男の胸に手で触れている妖狐の姿がいるという事は……。

……あの少女のふわふわの大きな狐耳、腰まで伸びたサラサラの耳と同じ色の白髪に、小顔でぱっちりとした開いた美少女特有の瞳は動物系の魔物娘の細く縦に伸びた瞳孔が刻まれ、肩は細くなで肩で、腕は一の腕と二の腕が殆ど同じ大きさの筋肉とは無縁の両腕、細くて長い女性特有の指を持ち、胸は大きめで少女が動く度に左右に揺れるのがわかる。腰が細く、尻周りは大きくて、もふもふの尻尾は左右に適度に揺れ、内股になっっている太ももの肉付きはよく、短いスカートを履けば絶対領域から伸びる肉付きにこれまた男が惹かれるだろう。

「ありがとうございます、これで私も人間に……」

そんな少女に……。魔物娘の身体に……。

「だから……」

自分が……。

「私の身体、あなたにあげますね？」

なっ……てしま……。

その瞬間、彼の青白い身体は急降下していた。

降り立つ先は黒髪で日々冒険や訓練で鍛え上げたガッチリとした肉体の若い人間の男性では無い。小さくて細くて、それでいて胸は大きい一匹の魔物娘の身体……。いやだ、降りたくない、なりたくない。あんな身体になりたくない。あんな数が少なく高値で売買されているような魔物娘になってしまったら行き着く先は一つしかない。

だから、必死に抵抗しようとした。例えプライドを投げ捨てても抵抗したかった……が、虚しくも彼の身体は一匹の魔物娘に吸われていくのであった……。

「(成功……したのかな……?)」

妖狐が男の胸に触れて何分経過しただろうか……? ピクリとも動かなくなった二人を、アルラウネは静かに見つめていた。

本当に入れ替わったのだろうか……? 希望を持ちつつ住民になった入れ替わりダンジョンというのは本当なのだろうか? いざこうして目にするると半信半疑になってしまう。

……ぴくっ。と妖狐と男の身体が同時に反応する。己の手を何度も握りしめ、そして胸をぺたぺたし、股間に手で触れる男の胸には、もはやあの光は存在していなかった。

男の顔がぱあつ。と明るい物に変化していくのがわかる。姿形こそ別人、異性に変わり果てたものの……その目とその動きは何度も見た事がある命の恩人の癖に、アルラウネも半信半疑だった気持ちがある確信へ変わり、同じように顔を明るくするのであった。

「やった！ やったよ『アル』ちゃん！ ありがとう、あなたのおかげだよ！」
 「うんっ……！」

野太い男の声でぎゅっ。とアルラウネの手を取る人間の男の姿は異様な光景だ。しばし二人で喜びをわかちあった後、二人は元の身体を見た。

「そっ……そんな……ほんとうに……！」

妖狐の瞳は見た事がないどんよりとした物となり、狐耳と尻尾がしなっ。と力なく垂れているのに毛は逆立ちブルブルと震えている。

胸を大きく押し上げるそれをゆっくりと右手で触れ……胸が形を変えたかと思うと、左手は股間に触れていた。現実を受け入れる事ができないのだろうか、異性の身体になったというのに性的に興奮している様子も無く、何度も何度も何も無い股間を摩るその姿はとても情けなく見え……思わず男は声をかけた。

「本当ですよ。貴女は私になり、私は貴方になった。これは紛れもない現実です」

「ち、ちがうっ……！！ 俺は人間の男……！！ 妖狐なんかじゃない……！！」

「人間の男がこんな物を持ちますか？」

その手は狐耳に迫る。慣れた手つきで耳をふにつふにつ。と優しくマッサージし、毛玉をモフモフすると妖狐は力が抜け、女の子座りの形でぺたん。と地面に座り込んだ。

「気持ちいいでしょう？ コレをされると、まるで力が入らないんですよ。そして、こうすると……ね？」

